妹がリリカルで適当に武力介入

怒離留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹がリリカルで適当に武力介入

【Ｎコード】

Ｎ８２５８Ｓ

【作者名】

怒離留

【あらすじ】

神と悪魔のパシリ？のシィルの妹が転生することになりましたが、本人の要望により男に転生。作者の現実にいる妹を転生させるお話です。神と悪魔のパシリ？を読んだ方がサクサク読めます。設定をきちんと書く予定なので読むか神と悪魔のパシリ？を読んでから読んでください。お願いします。約一週間に２０００字更新を目指す（２０１１年１２月から）

始まりはこの方が・・・（前書き）

フェイトが男で転生ものを書く予定でしたが、妹の意見によりフェイトはいた方がいいよ！との意見がありましたので変更することになりました。すいません。

始まりはこの方が・・・

～携帯の着信音♪～

シィ「はい」

俺は佐久間さんからかかってきた電話をとると・・・

佐久間『もしもし？俺！俺だけど』

シィ「佐久間さん？そのネタは古いのでは？」

佐久間『俺さ、さっき事故ったんで金が必要なんだよね。だからさ、９０００万ジンバブエドルを俺の口座に振り込んでくんない？』

俺「ほぼ一円じゃないですか・・・事故をどう解決するんですか・・・」

佐久間『冗談はさて置いて・・・お前の妹な・・・』

な、何が起きたんだ！？俺の妹に！！

佐久間『転生することになったから！！』

俺「は？」

佐久間『で！任せるから！！』

え？な、何を！？

始まりはこの方が・・・（後書き）

執筆頑張ります。

プロローグ（前書き）

今回はシィルさん視点ですが、今回のみです。
この物語の主人公は作者の実在する妹を基にしています。質問は受け付けますが変な質問はなさらないでください。

プロローグ

さて、俺はとある場所の生体カプセルの前に居る。

シィ「さてと・・・要望道理にしてやるか！」

俺が生体カプセルの端末に多くのデータを打ち込む。要望どおりって結構無理ありすぎないだろうか？まあ、佐久間さんがこの通りにって言っていたからな・・・頑張ろう。

1カ月間後・・・・

生体ポッドには完全な男の子が！！佐久間さんから渡された妹からの要望を元に作ったメモの通りに身体はできた！

シィ「起動！ポチッとな♪（ボ〇ッキーの声）」

とは言いつつも起きないので生体カプセルから出し、ベットに寝かせ、服を着せる。服は白衣だ。

？？「ん？ここどこ？」

シィ「目を覚ましたか？」

？？「え！？」

男の子は起き上がった。そして俺を抱きしめた！！

？？「かわいい！！」

俺は男に抱きしめられるのが嫌なのだが、とりあえず一回は許そう（怒）妹だし・・・（怒）

シィ「離せ！！！」

俺は腕を振りほどき離れる。

??「な、なんで！?」

いや、急に抱きつかれたら普通嫌だろ。

シィ「状況を説明しようか・・・〇〇?」

??「え?」

シィ「俺はおまえの兄の▽▽だ。お前と一緒で転生者という訳だがな」

??「！！！?」

声になってないのか、やっと自分の体について気付いたのか。まあ、どちらでもいいだろう。

??「！！」

なんだ！?何を思いついた！?

??「ここはもしかして・・・リボーンの世界！?」

シィ「残念だが違う。」

??「え?」

なんでそんなに絶望した顔なんだよ。

何か思いついたようだな。

シィ「ついでに言っておくとドラク○ウスの世界でもないからな。」

また落ち込んだな。

??「・・・じゃあ、ここはどこの世界?」

シィ「なにって・・・リリカルな世界だけど?」

??「何で!!今すぐリボーンの世界に送って!!!」

シィ「いや、無理だから。」

??「な、何で!?」

シィ「佐久間さんから言われてるからな。まあ、A，sまで終われば別の世界に行けるからその時は別の世界に送ってやるよ」

??「本当!?」

シィ「ああ、で、お前は何て名乗るんだ?転生前の名前では面白くないだろう?考えてあるのか?」

??「う～ん・・・・・・・・・・・・・・・霧音(きりね)　怜(れい)と名乗る

ことにする」

シィ「俺はシィル・デモン・ディ・ドラコだ。日本では佐々木　悠と名乗っているがな。」

怜「シィル？って呼べばいい？」

シィ「ああ、そう呼んでくれ。」

俺はゲートを開くと中から青い携帯電話とｉ○ｏｄとｉ○ｈｏｎｅ４、ノートパソコンを取り出す。

シィ「あと、これな」

俺はピアスをポケットから取り出すと怜に渡した。

怜「これ何？」

シィ「お前のデバイスだ。魔力粒子を発生させるＧＮドライブが５つ搭載されている。姿は００に出てくるガンダムだけだ。まあ、管理局からしたらこれはＳＳＳクラスのロストロギアかもしれないがな。注意としてはこれを取られるなということと壊すなということだ。」

怜「う～ん？」

シィ「あと、ダイオラマ魔法球（シィル仕様）と霧と雨のＡクラスリング二つずつとボックスを１６つ。」

怜「リングとボックス！？」

シィ「欲しいだろ？」

目をキラキラさせるな。キモイ

怜「欲しい」

シィ「幻術についての本も持っていけ」

俺はたくさんの本をゲートから出し、床にぶちまける。

怜「え？こ、これ全部読まなきゃダメ？」

シィ「当たり前だろ」

はっきり言って全部読まないと理解できないが、こいつが全部読み切れるか俺は知らない。ちなみに俺は幻術が使えないけど有言絶対実行（ユート）があるし、脳内君主（ブレインタイラント）もある。正直、幻術はあんまりいらない。

怜「い、いやだ！！！！」

シィ「とりあえず、戸籍、口座の通帳とキャッシュカードは置いていくから確認しろ。」

怜「どこかに行くの！？」

シィ「あとは自分で何とかするんだな」

俺はゲートを展開し、中に入って行った。居なくなるときに佐久間さんからの手紙を落としていった・・・・

プロローグ（後書き）

有言絶対実行（アブソリュート）は言ったことが本当になるという能力で生物、物質の両方に使える能力で吸血鬼として上位にいる者には能力の消耗が激しく使えない場合もある。

脳内君主（ブレインタイラント）は対象者の脳を操作し、悪夢をループさせたり、記憶を操作できたりします。

この二つはこの物語にはおそらく関係ありません。

第一話（前書き）

やっとか・・・

主人公「あとがきは乗っ取られました」

第一話

俺はとりあえず、おに・・・シィルが落としていった手紙を拾う。手紙は白いとてもきれいな紙でできているようだ。

「え～っと、私宛か・・・差出人は・・・佐久間栄太郎？」

まずは開けてみよう。

手紙の内容は・・・

おっす！オラ、栄太郎！
いきなり転生でびっくりしてっかも知れねえけど、これからのことを考えるとオラ、ワクワクすっぞ。ってネタはもういいかな？住む場所は最後の紙に書いてあるから無視して、保護者はシィルだ。資産管理についてはできれば自分でしろよ。Ａ，ｓまで終わったらリボーンの世界に行くことも考えてあげよう。まあ、がんばれ。ちなみにこちらではそちらのことを観察しているので面白くなるように願っている。一応言っておくが、物語を見てるだけは駄目だ。と書いてあった。

二枚目には資産の詳細、三枚目には私の能力の説明、四枚目にはｋｏｎｏｚａｍａ！というネット通販？のやり方、５枚目に転生者としての契約内容、６枚目に住む場所の住所と簡単な地図が記されていた。

現在の私の資産は日本円で１０００億の銀行での貯金と株券１２００億相当があった。多すぎない？他には魔法球に多くの品があるらしい。まあ、面倒なので後で確認しよう。能力については後にしよ

う。ｋｏｎｏｚａｍａ！の使い方は・・・魔法球内のパソコンや無線ＬＡＮでｋｏｎｏｚａｍａ！を検索し、そこで某密林と同じように操作すればいいのか・・・簡単だね。転生者としての義務は・・・我々を楽しませるために原作ブレイクをしなければならないこと。他には・・・ないの？ないみたい・・・・最後に住むところの略図だけど・・・私、地図読めないくらい方向音痴なんだけど、どうしたらいい？

『知らないが、自分で何とかしろ』

今何か聞こえなかった？まきい〇みさんの声だった気がするんだけど！？

もしかしてシィル！？

・・・気のせいだよね？

とりあえず、魔法球でいろんなこと確認しないと・・・

魔法球の中は私の家？いや、中に入ってみると全然違うけど・・・私の部屋だけ一緒だ・・・ペンタブとパソコンがあった。ちょっと画面のサイズとか本体のケースとか違うけどパスワードからデスクトップのショートカットの配置まで一緒だ。兄のデータがないけど。いや、ブックマークがそのままなのはうれしいんだけど・・・これってどうなってるの？

とりあえず、ネットはつながっているみたいだ。これでネットがつながってなかったらどうなっていたことか・・・

持ち物の確認は大事だよね？

確認中

あとデバイスの使用の確認中

説明書を読んだけど何が何だかわからない。使ってから覚えるしかないのか。
あと、このまま自分のことを私というのも可笑しいから気をつけないと。

気になるのはあのシュミレータとかいうのかな。どうやって使うのかはわからないけど。
お腹すいた・・・・・・
俺は台所に行き、食べられるものがないか探す。炊飯器、中身なし。
パン、無し。
カップめん、無し。冷凍食品、あるけどご飯を必要とするもののみ。
缶詰、サバ缶のみ。パスタ、あるけどソースがない。
冷蔵庫には・・・野菜と肉、味噌、ウーロン茶、漬物、ドレッシングだけ・・・・

「とりあえず、サラダ食べるしかないか・・・・」

『いや、作れるものいっぱいあるだろ』

何か聞こえた気がするけど気のせいだろう。あのアホ兄ならば、ご飯を炊いててくれたり、パンを買っておいたりすればいいのに。

『自分で買いに行けよ。そして、まだ料理のレパートリー増えてないんだな』

あの兄に限って自分からパンを買うとかあんまりなさそうだからパンがないのは想像できたけど。
バターとお菓子類が全く見当たらなかったことを考えるに、自分だったらこれでいいだろうと思ってたんだな。
お菓子くらい買っておけよ
俺はサラダを盛りつけ、適当にドレッシングをかけて食べた。あまり腹が膨れた気はしない。
ご飯は炊いておこう。炊飯器をセットしてから、ＰＣをつけて部屋にあったＤＶＤを見つつ、これからどうするかを考える。
まず、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩは嫌だから逃げるとして、フェイトちゃんは見てみたいな。はやてちゃんは友達になれるなら友達になろう。

♪～

携帯が鳴っている

メールか・・・・
何々・・・・兄からか・・・・・
かてきょ３５巻買った？
・・・・・買いに行かないと！

俺は財布を持ち、颯爽と本屋に向かった。
かてきょ３５巻発見！！！
走って手を伸ばすと・・・

ドン

俺は轢かれた・・・・車いすに。そして転んだ・・・

「ご、ごめんなさい！！！」

車いすに乗った少女はこっちを向き、頭を下げた。どこにでもいそうな普通の９歳？くらいの女の子だ。

「だ、大丈夫！！俺はかてきょ３５巻を買うんだ！！」

俺は立ち上がる。何としてもかてきょ３５巻を買うんだ！！そして読むんだ！！死んで読めなかったかてきょの続きを！！

「え？うちも買うんですよ。かてきょ好きなんですか？」

そうなんだ～。でもこの子からは私と同じような感じはしない。おそらくまだ、あちらの世界に染まっていないのだろう。

「もちろん！！かてきょ最高でしょう」

つい、答えてしまった。このワクワクしているのがわかってくれるとうれしい。

「うちも好きなんよ。私はツナがすきなんよ」

私は黒ツｎ・・・いや、何でもないよ。とりあえず。

「俺は骸が好きだよ。」

ごまかした。俺は立ち上がって、車いすの少女を向く。

「ん？そのペンダントは？」

車いすの少女は俺の首を見ている。おそらく、兄が・・・シィルがくれたデバイスだろう。名前はセカンドって書いてあったけど。どうしてだろう？

「これ？」

俺は首に下がっているペンダントを少女に見せる

「それって、ソレスタルビーイングのペンダント？どこで売ってんの？アニ〇イト？ゲー〇ーズ？」

「兄に貰ったんだよ。」

家と一緒に・・・とか言いたいな・・・

「へぇ～お兄さんがおるん？」

兄って顔じゃなくなっていたけどね（笑）

「最近久しぶりに会ったらくれたんだ。」

兄、死んでいたしね。俺は死んで転生する間で結構あったからかなり久しぶりな感じがする。
あっちはどうだったのかな？

「久しぶりって仕事か何か？」

「そうみたい。結構年が離れているからあんまり話さないけど。」

年は今は離れているはずだけど、年は3つ違いだった。あんまり話

さないのは俺が女だったのと、部活で忙しかったからなんだけど・・・・まあ、嘘は言ってないよね？

「なあ、ガンダム００では誰が好きなん？私は断然ロックオンやな」

俺は断然兄派です。

「俺は刹那かな。兄はフォンだって言ってたけど。」

そしてあの兄は兄ロックオン嫌いだったな。

「フォンって誰？そんなキャラ出てた？」

「外伝のキャラらしいよ」

「外伝？」

「コミックであったはず・・・」

私は角○コミックの方に行き、ガンダム００Ｆを探して、あった！

「これ！」

俺は右手でガンダム００Ｆを少女に見せる。

「へぇ～これが外伝か～」

「ガンダムは結構外伝が多くて、そっちの方が面白いらしいよ。俺は読んだことないけど」

「読んだことないん？」

「ちょっとは読んだけど。あんまり納得いかないこともあるよ。」

「そうなんや～」

「家にガンダム００に出てくる機体の設定資料があるから見る？」

「うん！行く！」

この子どっかで見たような気がするなぁ・・・

第一話（後書き）

シィ「何で俺がここにいるんだ？」

作者「まだ、登場する予定だからな。」

シィ「はぁ！？」

作者「まあ、原因は最近ＯＯＯが終わったからなんだけど」

シィ「意味わかんねえよ」

作者「では次回まで、あでゅ～」

第二話（前書き）

いつになったら戦闘するのだろうか・・・

第二話

「家に来るのはいいけど、まず会計済ませよう？」

「そ、そうやね」

車いすの少女は妙にわくわくしながら、俺の方を見ている。何が楽しみなんだ？名前も知らない男の子の家に行くというのに・・・・

「あ、俺、霧音　怜」

「私は八神はやてです。はやてはひらがななんよ。」

やっぱりこの子がはやてちゃんなんだ・・・

「はやてちゃんって呼んでいい？」

「ええよ、家も怜君って呼ぶから」

「よろしくね。はやてちゃん。」

俺は右手を差し伸べる

「こちらこそよろしく」

はやてちゃんは俺の手を握り、握手に応じてくれる。

その後会計を済ませ、俺の家に帰る。

帰り道でいろいろ話したが、いや、愚痴なのか？

話からはやてちゃんは原作通り、両親はおらず、学校には行ってい

ないらしい。
保護責任者の方達に学校には行くように言われているが、無視しているらしい。週に一回くらい来てくれるのは良いんだけど、生活費を振り込んでくる額が半端無く多くて、貯蓄だけで、人生全うできるそうだ。というか、そういうことをやりそうな人に最近なった気がするのは気のせいだろうか？シィル・佐々木？どっかで聞いたな・・・

別人だよね？というか、確か原作では、グラｈ・・・いや、グレハルさんとかいう方が、後見人だった気がするんだけど・・・

とりあえず、家に着いたので、鍵をあけると、靴がある。

「ただいま・・・・」

「おかえり～」

え？俺、一人暮らしでしょ？何で、女の人の声が聞こえるの？それになんか、良いにおいが・・・・

「良いにおいやね」

「え？そうだね」

誰だ？俺しか住んでいないはずだが・・・

「お、そろそろだと思ったんだぜ」

だぜ？というか、やっぱり、シィルか・・・兄か・・・？ちょっと待とうか？すごく笑顔で俺を迎えている。

何かあるような気がする・・・・とても嫌な予感が・・・

「蓮君、おねｓ「怜の兄だぜ」・・・え？」

ｄ（＾ｖ＾）っと自分のことを親指で指さし、笑顔でそう答える。だけど、そのとても素敵な容姿は女と思わせるものであり、男らしさは全く感じられない。

「兄の佐々木　悠だぜ！」

おそらく、魔理沙の真似をしているのだろう。ただ、恰好はジーンズに白のシャツ、紺のエプロンの装備だ。

ｄ（＾－＾）とでも表現すれば良いだろう。というか、表現しづらい。

「すいません宅配です。佐々木　悠様はいらっしゃいますか？」

宅配業者の女の人が、俺の後ろから話しかけた。

「はい、俺です。判子は・・・あった」

兄はポケットからハンコを取り出し、ハンコを押すと、荷物を受け取った。

荷物でけえ・・・

「ありがとうございました」

「どうもありがとうございます」

女の人は荷物を玄関に入れ、帰って行った、荷物を玄関に入れる時、

俺達は外に出て、その様子を見ていた。
「で？シィルさんは佐々木　悠って名前なの？」
はやてちゃんはやはり、兄を知っているようだった。
「一応、佐々木　悠って戸籍で出している。日本名ではだけどな。」
「シィルって名前はどこで使っているんですか？」
「秘密だぜ」
かなりムカつく。この言い方やめてくれないかな。
「後で役所に確認しに行きます。」
「確認するといいぜ」
「何しに来たんだ？」
「怜、お前料理するのか？栄養バランスとか考えないだろう？」
「そんなことはない」
「嘘を言え、部屋を見たら・・・・」
「勝手に見るなよ！！」
いや、見られてまずいものは置いてないけど、兄に勝手に片づけられると、わけのわからない配置にされて使いづらくなるんだよ。こ

の気持ちわかるかな？

「一応、掃除機はかけておいたぞ」

「そうですか！」

チッ、すでに遅かったようだ。だが、掃除機をかけたということは床のものを机に積み上げただけだろう。まだ大丈夫だ。時間はある。片付けられるはずだ。

「はあ、お前はどうしてこうだらしないんだ？時々確認しに来るからな。今日は料理作ってやったから食べるいい。はやても食べていけ。この家の鍵もあげるから好きにこの愚弟で遊ぶといい」

「ちょっと待て！どうして、はやてちゃんに鍵を預けるんだ！！俺を少しは信用しろ！！」

冗談じゃない。はやてちゃんに見られてまずいものはあるんだ。それだけは回避しなければならない。

「『信用？無理、だって高校生にもなって兄に掃除機をかけてもらうまで机の周りを掃除しないのは誰だ？』」

『』内は作者の声

「部活が忙しいんだって言っただろ！！！」

「はいはい、部活部活ｗｗｗ」

「ぐうううううう」

この兄絶対殺す！！！このイライラする言い方は間違いなく生前の兄そのものだ

「私が怜君がきちんと生活するかを確認します。」

「そうしてくれると助かる。怜、これははやての家の鍵だから」

「ちょっと待って、どうしてうちの家の鍵を怜君に渡すん？」

「何を言っているんだ？学校をサボっているのは知っているんだぞ？怜に連れて行くように頼むだけだ。」

は？俺は学校なんて行かねえぞ？そもそも俺は高校卒業してるし、今更義務教育とか嫌すぎる。

「学校とか俺も行かないｋ「佐久間さんが機嫌を悪くするからな」・・・義務教育って大事だね。はやても一緒に行こうよ」

「いやや！」

「怜を同じクラスに転入させたから」

「なら行く」

友達いないのかな？

「真面目に勉強しろよ」

「めんどくさい」

はやてちゃんはこのままだとダメ人間になってしまうのではないだろうか？

「いやだ！」

勉強大嫌い。絶対勉強なんかするもんか。大体、俺は高校卒業したし、今更小学生とかどこの名探偵だよ。学校生活なんか寝て過ごしてやる。

「頑張れよ」

「絶対嫌だ。」

「まあ、適当にしてろ。」

「そんなことより、家に入れてくれへんか？」

俺たちは玄関ではなく外に出て話していた。シィルは荷物を地面に置いている。よほど重いのだろう。

「そうだな」

「どうぞ」

「お邪魔します。」

俺たちはやっと家の中に入っていった。

第二話（後書き）

シィ「おい、どうして俺がここにいて、魔理沙口調なんだ？」

作者「酒を飲んでた時に書いている奴だから忘れた。現在は飲んでないけど、何となくそのままにしたんだよね。」

シィ「俺の方の続きはまだなのか？」

作者「かなり続きを書くのを悩んでて困っているらしい。どうやって、黄巾の乱まで行くかを決めてはいるのに書けない」

シィ「そこはがんばれよ」

作者「うん、頑張ってみる。」

第三話（前書き）

戦闘シーンなし・・・

第三話

家の中に入ると、廊下にあったはずの洗濯する予定だったものがなくなり、代わりにしっかりと畳まれた服がかごの中にあった。他には、漫画が散乱していた本棚の前がきちんと整理整頓されているなど、結構違いがある。もしかしたら、この床も掃除機がかけられているのかもしれない。

「ほあ～、きれいに整頓されとんな～」

ドヤ顔のシィル・・・ウザ！！

「晩御飯まだだろう。用意したから食べていくといいよ」

「え！？いいん！！やった！！」

何喜んでんのはやてちゃん！？俺は悪い予感しかしない。

「じゃあ、用意するぞ」

俺とはやてちゃんは洗面所に行き、手を洗う。そして戻ってくると案の定・・・

出された料理は・・・

マツタケの代わりごはん、エリンギ入りの味噌汁、ぶなしめじと野菜炒め、餃子・・・

俺に何を食べさせる気なのだろうか？全部俺の嫌いなキノコ入り・・・そして餃子・・・・間違いなく干しシイタケが入っているものだろう。あの糞兄死ねばいいのに！！！

「ほら、残さず食えよ。」

このドヤ顔である。死ね！！今すぐ死ね！！

「いただきます！！」

はやてちゃんが嬉しそうにご飯を食べている。嬉しそうに・・・

「どうした？怜？おいしい晩御飯が冷めるぞ？」

「この鬼が！！」

俺は結局、キノコをどけて大体のものを食べた。だが、シィルに何らかの力を使われて無理やり食わされた。
絶対に絶対に俺の手で兄を殺す！！！

「怜君、キノコ苦手なんか！これは良いこと知った！！」

そしてこの悪い顔。どうしてこの二人は他人（俺）の不幸で笑顔になるのだろうか。絶対復讐してやると決め、まず、かてきょを読むことにした。００の資料ははやてちゃんに貸してあげたが俺は読んでない。
デバイスの武器の確認にもなるので後で読んでおこう。そう、後で。

「お～い、怜！食べたものの後片付けくらいはしろよ！！愚弟！」

あのアホ兄はアレ（キノコ料理）を食事と言い張るのだろうか？あのボケの言っていることを無視し、俺はかてきょに集中する。

「パソコン初期化するぞ！！」

ダメだった。料理の片付けをまずしなければならないようだ。

「したら殺す！！」

俺はキッチンへと向かい、洗い物を片付けていく。はやてちゃんはその間に次々と俺の本棚を読破していく。

「少女漫画が多いなあ」

一つの疑問が浮かびつつ・・・

「終わった！！」

やっと、皿洗いから解放された！

「じゃあこれ持って行け」

シィルはお盆に乗った二つのティーカップに入った紅茶を俺に渡してくる。この香りは・・・

「ダージリン・セカンドフラッシュ・・・」

「懐かしいだろ？おいしく淹れておいたからはやてと飲むといい。マシュマロもいるか？」

シィルは何もないところからマシュマロの入った袋を取出し、俺に渡してくる。お盆を右手に持ち、マシュマロの入った袋を左手で受け取り、はやてちゃんのいる部屋に持っていく。

「はやてちゃん、お茶を持ってきたよ。」

「ん？ありがとうな」

はやてちゃんはカップを受け取り、香りを楽しんでから紅茶に口をつける。

「おいしい」

紅茶の淹れ方、生前より格段においしい。香りも良い。高い葉を使っているだろうが、紅茶は淹れ方だけでも葉の本来の味をダメにしてしまう。現に俺は幾度となくダメにした。兄は蒸らす時間は勘だと言っていた。葉により淹れ方は異なるらしいが俺は知らない。ちなみにコーヒーの淹れ方は知らないと言っていた。

「マシュマロいる？」

「いただくわ」

はやてちゃんはマシュマロの袋からいくつか取り出し、口に入れる。俺は紅茶に浮かべ、それを眺めながら、これからのことを少し考える。シィルに聞いた話によれば、現在俺は魔王様と同じ私立聖祥大附属小学校３年生で４月らしい。つまり、原作開始までの時間は残り少ない。一応まだジュエルシードはまだ落ちてきてないらしい。ひとまず安心だが。

闇の書についてはすでに手は打ってあるらしく、問題ないらしい。ある程度簡単な流れでハッピーエンドになるらしい。俺がよほどアホなことをせず、ヤンデレでバットエンド以外は。

どんだけ簡単な流れですか！！これって、ばらしていいの？良くないよね？佐久間さんを満足させられなかったら俺、かてきょの世界にいけないんだけど！！！

「どうしようかな・・・」

「何を悩んどるん？」

「なんでもないよ。ただ、俺は何をすべきなのか考えていただけ」

「悩んでも良い考えが浮かばないなら漫画を読めばいいんよ」

「いや、ダメだろ」

思わず突っ込んだけど、絶対本気で言っている目だ。

「良い結果を出すには日々の努力だ。」

兄からのありがたい言葉・・・だが、兄よ、生前努力したことないって言ってませんでした？

「努力とか面倒や～」

「努力の結果、おいしい紅茶やコーヒーが淹れられるようになった。努力は大事だ。」

「え？そこなの？」

第三話（後書き）

シィ「イージーモードです。」

作者「私も結構妹に甘いところあるよね？」

シィ「だが、いい加減にしてほしいところがいっぱいあるな・・・」

作者「たとえば・・・現在近くにある妹の机が汚くて片付けようか本気で迷うとか？」

シィ「洗濯物片付けないとか？」

妹「片付けるって言ってるでしょ！！うっさいな！！疲れてるんだよ！！」

現実の妹はこの小説よりひどくないかもしれないけど、私の精神をガリガリ削ります。

作者の心の声（今日こそブ○ジャーをネットに入れて洗濯の予約したのかな？）

伏字意味あるかな？

P．S

妹と怜の髪がロングかショートで言い争いました。
結果、絵を書くからそれを載せることになった。
まだ書かれていないのでわからない。
私はショートでと言いました。

設定（前書き）

前回に話した怜の絵、ありました。（たぶんこれであっているはず）
>>ではなかったので消します。

ムーンタイズの設定変更します。

設定

霧音（きりね）　怜（れい）

容姿

白銀髪ロング（下ろすと腰より長い）いつもはおろしているが何かする時はポニテ
ただし、幼少期は髪が黒。
瞳は藍色、首からソレスタルビーイングのネックレス（デバイス）
カッコイイ系のイケメン
身長は高め（成長すると１７８ｃｍ）
体重（成長すると６６ｋｇ）

口調

一人称は俺
「は？」「うぜぇ」「は？馬鹿じゃん」
人を小馬鹿にしたような感じでも偶にいいことやカッコ良いことを言う
前世が本当に女なのかが気になるくらい男口調。

性格

S。クール（笑）頭で色々と考えているがそのまま発言すると馬鹿なのでしゃべらない。可愛いものが好き。巨乳が嫌い。前世は腐女子。
元が女なので女心がわかる（ただし、女ってめんどくせぇ～と真剣とかいてマジに言っていた）。男は単純だと思っている。本人もかなり単純

趣味
音楽。ピアノ演奏。サックス演奏。

好き
骸×ツナ。ニ○ニコ動。可愛いもの。風○様。高いところが好き。

苦手
猫（前世が猫アレルギー）。キノコ。茄子。勉強。

能力
吸血鬼（ファーストブラット）
血液中にVウイルス（ｒｙ
ムーンタイズは・・・・

霧と雨の属性の炎
以下略

幻術
フランくらい（家庭教師ヒッ○マンの方でスカーレットではない。）

シィルに渡されるもの
携帯（青）ｉＰ○ｄ、ｉＰ○ｏｎｅ４、パソコン、日記帳。
仮面ライダーの変身ベルト（電王、ディケイド、Ｗ）
魔力粒子太陽炉５基搭載のデバイス。
お金（数億）

作者から一言

髪は切る予定？
後、生活がだらしない
現実の妹に幻想を求めるな！

シェル・デモン・ディ・ドラコ（佐々木悠）
無敵の吸血鬼と思ってください。弱点は作者的に過負荷。大嘘憑き（オールフィクション）　は効かないけど却本作り（ブックメイカー）は弱点
大体のものは食べれるが本人も意味の分からない苦手なものが多い。ブラック以外のコーヒーとか砂糖入り卵焼き、ウニなど。
目立つ能力はゲート。本当の力は時空間を操る程度の能力。あと、圧倒的俊敏性、加速能力、演算処理能力。

デバイスと魔力粒子太陽炉

魔力粒子太陽炉

魔力粒子太陽炉はガンダム００で登場するＧＮドライブと同じように魔力粒子を発生させて魔力粒子で同じようなことができる。魔力粒子太陽炉には魔力粒子を発生させる特性を持つ波を発生させる小さな魔石が入っている。魔石はかなり稀少ででシィルも６基の太陽炉のみしか創れていない。ガンダム００で創られた６基の太陽炉に対応するものである。
魔力粒子は魔力素・魔力よりさらに細かい粒子であり、ＡＭＦの発動範囲内では魔力粒子の使用はもちろん可能。さらに魔力が発生せず、魔力素しか存在しないので、通常より、コンマ数％粒子生成量が上がる。
魔力粒子擬似太陽炉はこの魔力粒子太陽炉の仕組みが理解できていれば結構簡単に作れるが、魔法的運用、デバイス化、生物への魔力

粒子の影響などの問題に時間をかけなければならない。更に、魔力粒子コンデンサ、魔力粒子貯蔵タンク、トランザムシステムなどの研究をしなければならない。魔力粒子太陽炉は管理局としてはのどから手が出るほど欲しいものであり、デバイスの技術力についてはそれ以上にのどから手が出るほど欲しいものであろう。だが、シィルの作ったシステムによりこれらは解析不能であり、クラック不可能である。仮に管理世界の技術力を総動員しようが、転生チートオリ主が解析使用が不可能である。いくら解析しようとも、シィルが管理するヴェーダ並みの能力を持つ大型サーバーの監視がある限り不可能である。
ちなみに、次元連結システムは能力の制御に失敗し、お蔵入りになった。

シィルが創った魔力粒子擬似太陽炉は生物への魔力粒子の影響を問題なくクリアし、デバイスとのマッチングもクリアした。セカンドの中に１つ入っていたりする。

セカンド（デバイス名）

シィルが創ったチートデバイス。分類はアームドデバイスのはず・・・。起動する機体は全身を覆う鎧のようになる。機体を装着した使用者は本人の命令、もしくは命にかかわる場合を除き解除されない。装着者の命が危ない場合、装着が強制排除されるが、シィルが起動実験を行った際には一度もそういう事態に陥ったことは無く。寧ろ、装着している方が命の危険が減る場合が多く、生命維持装置も付いているので結構安全で、装着していればどのような空間でも活動可能である。ただし、ガンダム００のガンダムと一緒で水中戦では魔力粒子の威力は激減する。
このデバイスは本来はファーストというデバイスに６つの太陽炉と

第二世代から第四世代までのガンダムが入っていたが、Ｏガンダムの太陽炉以外を入れ、シィルが気に入っている第二世代とその他を取り除いた。アニメ版の４機とその発展型、その強化パーツが入っている。シィルが第二世代のガンダムが好きなので第三世代、第四世代、第五世代ではシステム、武器の差だけで機体の差は結構少なく、粒子運用率はほぼ高い数値で安定させられている。
シィルはＯガンダムに搭載された太陽炉を持っており、残りはすべてこのデバイスに搭載されている。第４世代と第５世代は第３世代でのデータをもとに最適化をしているため、使用不可能。ただし、シュミレータでは使用可能。
魔力粒子は太陽炉、ＧＮ粒子貯蔵タンク、ＧＮコンデンサー内にエネルギーが残っている限り、粒子を使うことはできるが、虚数空間などの魔力が存在しないところでは本来、太陽炉でエネルギーをつくることはできないのだが、太陽炉内に膨大な量の魔力が貯められているため、年単位で魔力粒子が切れることは無い。ガンダム００では第２世代を基に第３世代のガンダムがつくられてるが、このデバイスのガンダムは１から作り直されている。理由は第２世代のガンダム達の完成度が高すぎて、面白くないという理由からである。なので、一部制限がされている機能がある。（トランザムは使用可能）

搭載されている機体は

第三世代

ガンダムエクシア
フル装備・ＧＮアームズＴＹＰＥ－Ｅ・アヴァランチダッシュの装備は入っている。
リペア？ねぇよそんなもん。

ガンダムデュナメス
ＧＮフルシールド・トルペードユニット・ＴＹＰＥ－Ｄの装備は入っている。
超高高度射撃銃は入っていないが、その代わりにＧＮ超高圧縮超遠距離射撃銃が入っており、超高高度射撃銃より計算が大変だが、威力は保証できる。

ガンダムキュリオス
テールユニット・テールブースターはあるが、ガストユニットがない

ガンダムナドレ
アクウオスユニットなし

ガンダムヴァーチェ
ナドレの装備ユニット？である。もちろんパージ可能。フィジカルの装備も入っている。

第四世代

ダブルオーガンダム
オーライザー・ザンライザー・セブンズソード／Ｇの装備が入っている。
二つの太陽炉が安定しているため、オーライザーがなくてもトランザムが使用可能。

ケルディムガンダム
ＧＮＨＷ／Ｇに換装可能だが、サーガにはなれない

アリオスガンダム

ＧＮＨＷ／Ｍに換装可能だが、アスカロンにはなれない
ＧＮアーチャーはハロが制御し、アーチャーアリオスになることが可能。

セラヴィーガンダム
ＧＮＨＷ／Ｂ・ＧＮＨＷ／３Ｇに換装可能
セラフィムと分離できるが、起動するときどっちを主にするか決めて、どちらかをビットにしてビットにしたほうはＧＮタンクで起動することになる

セラフィムガンダム
単体で起動可能。逆は不可

第五世代

ダブルオークアンタ
フルセイバー使用可能

ガンダムサバーニャ
最終決戦仕様に換装可能

ガンダムハルート
最終決戦仕様に換装可能

設定（後書き）

たぶん見てわからない人が続出すると思う。
設定改正（２０１１／１２／１３）

第四話（前書き）

作者「超久ｂ「死ね！！」痛い・・・」

シィ「何をやっていたんだ？」

作者「大学が忙しいんだよ。」

シィ「ところでこの話短くないか？」

第四話

はやてちゃんが帰った後、別荘のシュミレータことを聞くために、シュミレータの前にシィルを連れてきた。

「このシュミレータのこと聞きたいんだけど」

「ああ、このシュミレータか？俺が居る間はいらないと思うけど、説明しておくとセカンドを使った仮想空間で戦闘訓練を行うものだ。レベルは格闘戦、射撃戦、高速戦、総合戦の四パターンだ。それぞれレベルが約１００段階で分かれている。」

シィルがレベル設定画面を見せてくれる。レベルを変更可能なのか・・・ん？このＥＸってなんだろう？

「ん？ああ、このＥＸ（エクストラ）はやらないほうがいい。正直俺も仮想空間では勝てる気がしない。」

「どんな敵がいるんだ？全ガンダムとか？」

「いや、まだそっちの方が勝ち目がある。これは・・・・グレートゼオライマーだ。」

「は？」

「近中距離戦がガンダムフルクロス、中遠距離戦がガデラーザ５機、高速戦がガンダムグリープ、総合戦をダブルオークアンタで用意するはずだったんだが、総合戦は手元にグレートゼオライマーの試作

デバイスがあったからそのままデータを流用してしまったんだ。本当はグランゾンとかＳＲＸとかサイバスターも入れたかったんだけど、容量的問題で今は開発していない。」

「どれくらい強い？」

「一撃でも当たったら終了。次元連結システムでほぼ無敵バリア、エネルギー無限でチャージしない、空間跳躍可能。」

「何その無理ゲー」

「まあ、完成したけど。二度と日の目を見ることはないなと思った究極兵器とでも言っておこう」

「それに勝ったらかてきょの世界に連れて行ってくれる？」

「ほぼ無理だからいいだろう。というか。やってみて欲しい。ちなみに、トランザムで零距離の最高技を叩き付けてもバリアで無傷だから」

「どうやって攻略するんだ？」

「無理だと言ったろう？」

「ちなみにＥＸで一番弱いのは？」

「勝率で言うならガンダムフルクロスかガデラーザ５機だけど、ガンダムグリープはＰＸシステム使い終わらせれば勝てるんじゃないかな？ＡＩもガンダムグリープだけ弱くしているし」

「そんじゃあ、レベルの目安は？レベル１０までハロだけの操縦。レベル２０から平均的パイロットの操縦。レベル３０から８７４の操縦。レベル４０からガンダムマイスターだけの操縦。レベル５０からガンダムマイスターの操縦とヴェーダのバックアップ。レベル６０からガンダムマイスターの操縦とハロとヴェーダのバックアップ。レベル７０からフォン・スパークの操縦と８７４とハロとヴェーダのバックアップ。レベル８０からガンダムマイスターの操縦とハロ達とヴェーダのバックアップ。レベル９０はイノベイターの操縦とツインドライブ、ハロ達とヴェーダのバックアップ。って感じだ。」

「勝ち目はあるの？」

「お前何言ってんの？レベル８０くらいには勝てよ。それくらいできるように体を構成したんだからな。」

「え？どういうこと？」

「お前、気づいてなかったのか？」

「え？まあ良い、後で説明する」

「いや、良くないだろ！！どうなってんだ俺の体！！？」

「大丈夫だ、問題ない」

「それ死亡フラグだ」

「ぐーるぐーる」

右手で何かを回しているのか？

「わからないか・・・・フラググレネード・・・・出落ちフラグなのに・・・」

「？？」

「まあ、大丈夫だ。何か問題があるわけでもない。普通の人間より遥かに頑丈で身体能力が高いだけだ。」

「まさか、改ｚ「ちがう、それより、訓練だ。しばらくは俺と戦闘訓練だ。」え？」

「シュミレータにセカンドを接続して入れ」

「わかった」

俺はシュミレータの中に入ると、セカンドをシュミレータに接続し、横になると眠くなってくる。意識を飛ばしていくと・・・・

「やっと来たか・・・・」

そこには赤いエクシアに似た機体、兄が生前作っていたプラモとは少し違うが、間違いなくアストレアＦだ。センサーマスクを装備している。フル装備ではあるもののエクシアより少しだけ劣る性能のはずだ。私は周りが地上なのでエクシアを展開し、構える。

「アストレアF、シィル・D・ドラコ、訓練を始めるぜ」

「え？これって言った方がいいのか？」

「やる気が出るだろ？」

「エクシア、霧音　怜、目標を駆逐する！！」

第四話（後書き）

下書き、先月に終わってたりします・・・
忙しかったんですよ・・・・時間が欲しい。単位が欲しいよ。

第五話（前書き）

オリジナル設定多いかも・・・

第五話

ＧＮソードをライフルモードにし、牽制する。俺はアストレアの装備を知らないのだから、無理はできない。だからこそ、牽制して様子を見る。

「そう来るか・・・」

アストレアＦはＧＮライフルを持ち構える。ＧＮソード？はライフルモード？のままだ。ＧＮソード？ではビームは撃てないのか？ビームを撃って来るのを銃口から予測し、回避する。

「チッ！？」

俺はそれを避けると、左手に持っていたバズーカを撃ってくる。ビームではないところを見ると実体弾のようだ。俺はその実体弾を避けることに集中する。

「機体性能頼りか・・・まず、慣れさせるか・・・」

シィルがそう言うと、ＧＮライフルとバズーカを回避していると、目が慣れてきたのか、回避しやすくなる。

「慣れたか」

今度はアストレアＦの右腕にあるコンテナからミサイルが発射される。

回避をしながら、ＧＮライフルで当たりそうなものを撃ち抜く。だが、ミサイルはビームに当たる前に爆破され、粒子が散布される。

「どうするか見せてもらおうか？」

バズーカを撃って来るが、ライフルは撃ってこなくなった。回避が簡単になったので、ライフルを撃つ余裕が出てくる。

「え？」

ライフルから撃たれたビームはまっすぐアストレアＦに直撃したはずなのに、ダメージがない。アストレアＦはミサイルのコンテナを捨てた。

「どういうことだ！？」

何故！？ビームが効かない！？

「知らないのか？まあ、よく考えるんだな。」

俺が驚いている隙にアストレアＦはかなりのスピードで俺に近づき、蹴りを入れた。そして、バズーカを投げてきた。俺はそれを回避すると、ライフルを向ける。

「もっと他の武器も見ろよ」

使いたくはなかったが、ＧＮビームサーベルを使うため、腰のＧＮビームサーベルを取ると作動させる。

俺が腰のＧＮビームサーベルを取った瞬間、シィルは距離をとった。ＧＮビームサーベルってこんな短いの？

俺が驚いていると、僅かな隙を狙って、ＧＮソードで斬りつけてくる。

俺はそれを回避しきれず、装甲を斬られてしまう。薄く斬られただけだったが、斬られるということに感じる恐怖を感じ、距離をとる。

いきなりだが、アストレアFの行動がとてもゆっくりに見える。GNビームサーベルだと思っていたGNビームダガーを腰に戻し、肩のGNビームサーベルをとると、GNソードをソードモードにし、アストレアFとの距離を詰める。アストレアFはGNソードをソードモードにすると斬りかかってくる。あちらの方が、長さが短いため、リーチが短い。だが、その分隙が多いが、こっちは左手にGNビームサーベルを持っているあちらはGNビームライフルを構えたが、俺は左腕のGNバルカンでアストレアFのGNビームライフルを撃ち落とす。シィルは驚いているのだろうが、隙がない。それでも俺はGNソードで斬りかかると、GNシールドを斜めに構え、勢いをそらされてしまう。だが、GNシールドの表面は切り落としたのでもう使用はできないだろう。

あちらの装備はなくなった。今しかチャンスはない。

「トランザム!!」

こちらは一気に動きを加速させ、感覚と体の動きを合わせる。シィルはトランザムをしていない。

動きが見える!!

GNソードで後ろから斬りかかるとこちらとは違うドライブから勢いよく粒子が噴出され、回避される。動きが読まれている？いや、こっちの方が速いはずだ。そのまま、加速し、GNビームサーベルで斬りかかる。

「そんなに簡単に切り札を使うな。」

そう聞こえると、回避される。動きが見えている？いや、動きが完全に読まれている。

ここでトランザムを使われたら間違いなく負ける。だが、ここで引くわけにはいかない。

斬る斬る斬る！

回避回避回避・・・・

え・・・・どうして当たらないんだ？アニメではかなり速い速度で動いているはずだから回避は難しいはずなのに・・・

もう時間が・・・

3，2，1，0。負けか・・・

粒子残量が尽き、こちらの負けである。装甲の重さが体に負担をかけ、立っていられない。

「アホか？あんな戦い方ではすぐ鹵獲されて終了だ。かなり訓練が必要だな。」

重い・・・・助けて・・・

「助けて・・・」

「粒子のチャージが完了すれば、大丈夫だ。それまで何が悪かった

か考えてろ。」

お、鬼だ。助けてくれてもいいのに・・・・

第五話（後書き）

妹が怜はヴァーチェ使うんじゃなかったの？と聞いてきたのですが、アストレアにヴァーチェでは戦い辛いので（トライアルシステム無しでは）エクシアにしました。

第六話（前書き）

今回、本編少ない。

第六話

シュミレータでシィルに鍛えられ、シュミレータの仮想敵と何回か戦うとシィルに体を鍛えろと言われ、鍛え始めた。休憩中に戦い方について学び、魔法の構成方法を勉強させられた。今、シィルの能力で魔法球の現実との時間差を２４００倍にされ、１時間を１００日にしているらしいが、今のうちにすべてを叩き込みたいらしい。鍛練と勉強についてはきつかったのでよく覚えていないが印象に残ったのはグレートゼオライマーに勝ったシィル。ほぼ本気で勝てるってその時の映像見せてもらったけど何が何だかわからない。他に覚えているのは俺のムーンタイズのことだ。壊れたものを再生できたから「劣化複製（デットコピー）」かと思ったが、「再現（リピート）」だそうだ。他には「液化崩壊（キダイザース）」を使える。

「再現（リピート）」は物体の情報から再現させるらしい。他には他のムーンタイズの再現もできるが「劣化複製（デットコピー）」より劣るらしい。覚えたのは「劣化複製（デットコピー）」と「脳内君主（ブレインタイラント）」だけだ。他は覚えられなかった。「劣化複製（デットコピー）」はかなり頑張って覚えた。俺としてはベルチェと同じ能力の「劣化複製（デットコピー）」が良かったな・・・

シィルの能力は「完全冷却（パーフェクトフリーズ）」とか言っていた。寒いのは苦手だから俺の弱点だな。

Ｖウイルスの感染はナノマシンで防ぐので血を大量に飲ませなければ感染しないらしい。管理局で口外するのはやめよう。モルモットにされる。間違いない。

あっちでシィルがオーズになって遊んでいるけど。俺は見ていないし、言われた鍛練をするだけだ。

～～～～～鍛練中～～～～～

疲れたのでシャワーを浴び、キッチンで料理をしてご飯を食べる。

「腹減った～、お！俺も食べていい？」

「いいよ。」

俺は自分の食事を進める。

すぐにシィルは準備し、飯を食べ始めるが、だし巻き卵に箸をつけ、口に含むと・・・・

「怜、これ、砂糖入ってる・・・・」

「忘れてた」

シィルは箸で取った分のだし巻き卵を全部口に入れ、水と一緒に飲み込んだ。

「言ってほしかった。」

「マジで忘れてた。」

シィルの嫌いなもの・・・だし巻き卵に砂糖を入れたもの

本気で忘れてた。

シィルｓｉｄｅ（おまけ）

届けられたケースの中にはオーズドライバーとコアメダルが１０枚ずつそれぞれのグリードで分けて入れられていた。セルメダルも多く入っているが、１０枚ずつ入っているのでグリードにならないの

であろう。セルメダルをゲートに入れて、オーズドライバーを腰につけ、タカメダル、トラメダル、バッタメダルをオーズドライバーに装填する。

「変身」

タカ・トラ・バッタ

♪タトバコンボの変身ソング♪

「辛い」

変身が強制解除される。体がすごく重たくなり、とてもだるい。ケースの中に入っていた説明書を読んでみる。

ふむふむ・・・なるほど・・・そういうことか・・・

つまり、俺の欲望の器が映司よりかなり小さく、欲も渇いているのではなく少しはあるから変身に適さないのか・・・確かに考えてみれば、ファイズとかは人間じゃなく吸血鬼だからこそ変身できたわけだし、理解できる。今回は欲という体の問題ではないから変身できないのか・・・説明書では魔力や神力で負荷無しに変身できるようだな。

とりあえず、一通り変身してみるか・・・・

「変身」

クワガタ・カマキリ・バッタ

♪ガタキリバコンボの変身ソング♪

「うおおおおお」

次々と分身していく。ブレンチシェイドを５０体作ってみる。
適当に遊んで戻る。変身を解くと分身は消えた。再度変身し、分身が他のフォームに変身できるのを確認し、次のコンボへ。そういえば、ガタキリバはプトティラにジャンプ力負ける。バッタェ・・・

ライオン・トラ・チーター

♪ラトラーターコンボの変身ソング♪

「すげぇ、速く動ける！！って、いつも通りか・・・・でも、戦いやすい」
辺りに爪痕がたくさんできたのは言うまでもない。ちなみに、アクセルトライアルより早く動けるらしい。

サイ・ゴリラ・ゾウ

♪サゴーゾコンボの変身ソング♪

重力操作ができる。

「ロケットパンチ！」
ゴリバゴーンを射出！・・・・結構飛ぶね。ブレイドキングフォームよりは早く動ける。わかり辛！！

シャチ・ウナギ・タコ

♪シャウタコンボの変身ソング♪

「電気鞭、ウナギすげぇ・・・」

なんか心が躍った。壁を伝って歩くこともできるらしいが、面倒なので試さない。普通にできるから・・・
RXのバイオライダー的なこともできるらしいが、チートな感じは一切しないのは何故だろう？

タカ・クジャク・コンドル

♪タジャドルコンボの変身ソング♪

ギガスキャンをいろいろ試してみる。必殺技の威力は変化なしだった。試しにティラノ3枚とクワガタ・カマキリ・バッタとバッタをタジャスピナーに入れてみるのとプテラ×3、トリケラ×2、ティラノ×2でも、タカ、カマキリ×2、バッタ、トラ、チーター×2でも威力は一緒。どういうこと？

プテラ・トリケラ・ティラノ

♪プトティラコンボの変身ソング♪

一番楽かも。人によってコンボでかかる負担が違うのかも。尻尾が戦いに使えるのもいいよね。

タカ・イマジン・ショッカー

♪タマシーコンボの変身ソング♪

使ってから気づいたけど、イマジンメダルとショッカーメダル消えないよね！？

消えなかった・・・・必殺技の威力は最強らしいが試さなかった。

コブラ・カメ・ワニ

♪ブラカワニコンボの変身ソング♪

変身してみたけど映画見てねえから戦い方わかんねえ。とりあえず、変身解除。

いつか使う場面が来るのだろうか？ちなみにラトラーターよりジャンプ力はあるよ。

第六話（後書き）

食べ物は粗末にしない。

グレートゼオライマー、シィルの能力を全開で使えば勝てる！！ただし、世界ごと破壊される。なので勝つことはできます。たぶん・・・

液化崩壊（リキダイザース）が使えないと変形機構が使えないから無理にシィルが怜の体を作った時に入れた。

第七話（前書き）

シィルの出番が多すぎる・・・・

第七話

シィルｓｉｄｅ

「想定していたトランザムシステムより出力が小さいな・・・・」

前々回の戦いから得たデータをもとにトランザムシステムの改良を行っている。トランザムシステムは太陽炉内の圧縮粒子を一気に解凍させて爆発的な粒子を使用できるようにするシステムにしたのだが、設定した粒子解凍速度が出ておらず、粒子生成量も安定しない。手元にあるテジャスに積んでいる太陽炉は安定しており、想定する出力やトランザムシステムの運用ができている。デバイス側の問題もあるのだろう。デバイスを作ったときは容量があるから全部詰めればよいと思ったし、良く使うものを優先的にするシステムも入れたはずだが、これはひどい。久しくぶりに飲んだ酒でハイテンションのまま作ったのが悪かったのか。それとも、テジャスにアストレアＦとアヴァランチ・ダッシュユニットを積んでラジエルとセファー作ってた片手間で作ったからか？

「とりあえず、テジャスで取ったデータから・・・こうやって・・・」

魔力粒子運用効率の改善と太陽炉の改良をしながらセカンドの設定を変えていく。第四世代以降は削除で俺のとこのサーバーにデータを蓄積して完成次第、追加・削除すればいいだろう。空き領域の一部は戦闘データの回収に使うことにし、残りは処理速度の向上のため、ＣＰＵやメモリを増設。余ったところにゲームでも突っ込んでおいた。最適化が終わるのは２０分後、そのあと、現在シュミレータで頑張っている怜の戦闘データを入れて更に最適化・・・時間が

かかるな・・・・

side out

「動きが全然違う・・・」

体が羽みたいに軽く、今戦闘しているジンクスの姿がスローで動いて見える。最低限の動きでかわして攻撃を当てられる。シィルはアホみたいに速いから目で追うのも一苦労だけど、このジンクスの動きは体を対応させるのすら簡単だ。これなら、あの特訓よりは楽だ。だが、まだ俺は空中、宇宙での戦闘は行ってないし、多対一も経験していない。シィルが分身して殴ってきたのはカウントシナイヨ。

GNソードからビームを撃ってジンクスに当てると爆発した。

「レベル変更と空中をメインに戦うか・・・」

設定を変更し、空中をメインにする。

対戦相手は・・・・・

「そろそろ慣れたか？相手を変更だ」

「え？ま、待ってよ！？まだ空中戦やってない！！」

何を言ってるんだ？シィルが相手を変更？そんなことされたら強い相手が出てくるに決まっている。

「うまく戦え」

どう戦えと？せめて相手のデータくらいよこせ！！

＜ハロ・スーパーハイペリオンガンダム。セット＞

え？スーパーハイペリオンガンダム？なにそれ？００には出てない機体？

＜3、2、1、ファイト！！＞

始まってしまったが、相手は背中の大砲？をこっちに向けると何かを出してきた、俺は何が来るのかわからないので距離をとる。

『アルミューレ・リュミエール、展開！展開！』

三角の何かがバリアを張り、相手の全身を覆う。そして・・・

砲台から太いビームが撃たれた。回避したが、結構な距離が射程らしい。バリアの強度も気になるが、バリアはおそらくＧＮソードで斬れるだろう。だが、リスクが大きすぎる。ビームはおそらくダメージが大きいだろうし、近接戦闘ができないとも限らない。

「まずは情報集めだ。」

ビームを回避しながら、徐々に近づいていく。相手のガンダムは背中からのコードを肩の大きな砲台と左手のライフル？のようなものに挿している。見える武器はあれだけだ。バルカンやビームサーベルがおそらくあるだろうが、今は無視。

「当たれ！！」

ＧＮライフルからビームを放つが、回避もされず、バリアに阻まれ

る。バリアの弱い部分がないか何度も打つが特に変化無し。更に近くに行くと左手のビームマシンガンを撃って来る。バリアを抜けてくるということは威力が大きいのか？シールドに当てて確認するが、威力はそれほどでもない。太いビームは・・・当たりたくない。エネルギー切れを待つ？いや、あちらはさっきからビーム撃ちまくっているけど、休むのは放熱時だけだ。バリアが消えないのはどうなっているかわからないけどエネルギー切れはおそらく起こらない。バリアの破壊はあの三角を破壊すればよいのは間違いないだろうけど簡単にいくか？やってみよう。

GNソードを消して、GNブレイドを右にロング、左にショートで持つことにし、出現させると敵に近づくことにして近づいていく。太いビームを回避し、ビームマシンガンはくらうのを覚悟で突っ込む。武器を持っていない右側から攻める！！！

「行け！！！」

ロングGNブレイドがバリアを切り裂いた！！！

「行ける！」

もう少しのところでバリアを発生させている三角のものに届こうとしているところを

「え？」

届かなかった。正確には俺が下がったのだ。

俺の目の前を過ぎていく大きなビームの刃が俺の居たところをきれいに切り裂いていた。アレが当たっていたらと思うとゾッとする。

セカンドのおかげで助かったわけだが、右腕の三角のものから出るバリアがビームの刃となり俺を切り裂こうとしていたのだろう。瞬時に展開を解いたのは何故だろう？あれで攻撃すれば勝てるのでは？もしかしてできない？いや、間違ってバリア発生の三角を壊したくないのだろう。っていうか俺が倒せるのか？

射程はあちらに負け、こちらが相手に効く武器は近接のみ。あちらの方がリーチが長い・・・・詰んでない？

第七話（後書き）

スーパーハイペリオンガンダム
核搭載、アルミューレ・リュミエール搭載（時間制限なし）
武器はビームサブマシンガンのザスタバ・スティグマト、ビームキャノンのフォルファントリー、ビームナイフ

怜は勝てるのか！？

第八話（前書き）

更新が遅れてすいません。結構悩んだので・・・・

第八話

これは何とかなる。
トランザムを使えば楽に勝てるけど、使わなくても勝てる。
粒子をチャージしながら回避をし、一定の距離をとる。結構な量の粒子が貯まったので・・・回避しながら、距離を詰めていく。

太いビームを避け、ビームのマシンガンを受けながらもＧＮブレイドを両手に持ち、相手の後ろに回って、バリア発生源の三角を斬る！！

やはりその三角が無くなったことでバリアが無くなったので、メインスラスターを撃つ！！

しかし、相手の向きが変わってしまったためにバリアに阻まれ、倒すことができなかった。

「これなら勝てる！！」

相手のガンダムの弱点は分かった！これなら勝てる！！再度同じように三角のバリア発生装置を狙うことにして突っ込んでいくが、バリア発生装置の三角にＧＮブレイドを突き立てる瞬間に三角のバリア発生装置が三角錐になった。

「やば！！」

振りかぶった腕はもう止まることはできず、ロングＧＮブレイドで破壊はバリア発生装置の三角できたものの手が使い物にならなくなった。

「痛い」

シィルの特訓によってこの痛みに慣れたのですぐに右手の痛覚を切って思考する。だが、もう遅かった。一瞬の隙をついてこちらにビームを撃ってきたのだ、咄嗟に装甲に粒子を回すことによって防御するが、間に合わなかったらしく。

＜撃墜＞

負けてしまった。俺はシュミレータを出ると、シィルの居る部屋に行く。

「おい！！なんであんなのと戦わせたんだよ！！！？」

俺は急に乱入されたことを怒る。だが、シィルはなんで起こっているのかわからないような顔をする。

「え？何のことだ？」

シィルは椅子を回転させて俺の方を向く

「乱入させたことだよ！！なんか常にバリア張ってるガンダムを！！」

「デストロイガンダムか？」

「そんなにでかくなかった。」

「ハイペリオンかな？」

「ハイペリオン？・・・・・スーパーハイペリオンってのだった気がする」

「戦い方で勝てるかもしれないが、今のエクシアの性能じゃ勝ちづらかっただろう。ま、いい経験だと思え。おそらく、お前にハイペリオンをぶつけたのはテジャスだ。お前に貸した俺のデバイスが原因だろう。セカンドは返すからそっちでシュミレータを使えばそんなことは起きないよ」

「わかった。これは返す。」

テジャスを簡単に返すが俺の怒りはまだ収まらない。この怒りは何処に向けようか・・・・

第八話（後書き）

怜が勝つかどうか悩んで、結局負けさせました。最近忙しいです。
冬休みはいったはずなんだけどな・・・・

第九話（前書き）

今回短いですが進みます。

第九話

俺は今日から学校に通わなければならない。面倒なので今からサボってやりたいが、シィルに言われたように佐久間さん達に見られている以上通学しないという選択肢は存在しない。そして、通学はバスでできるらしいが、俺は徒歩らしい、なんでも体を鍛えるためにそうしたらしい。だが、隣のはやてちゃんはシィルに送られる。理不尽だろ。しかも弁当は俺がはやての分も作らなければならない。さて、弁当ははやてに預けてあるので俺は走るのみ！！

学校に着いてから玄関に靴を置きっぱにして、シィルからもらった上靴を履いて職員室に向かう。
職員室に着いて扉にノック。

「どうぞ」

「失礼します。転校してきた3年の霧音怜です。担任の先生はいらっしゃいますか？」

「はい、私です。」

返事をくれた先生は女の若い教師だった。いくつか説明を受ける。その後、いくつか質問と答えをやり取りし、教室に案内される。で、先生が先に入ってショートホームルームを始める。しばらく待っていると

「入ってきてください」

ガラ

「失礼します」

静かに教卓の隣の位置まで行き、教室を見渡す。魔力の高い白い魔王こと高町なのは様と金髪のアリサ・・・なんだっけ？あと、ボーっとこっちを見ているのがすずかさんかな？はやてもいる。

「自己紹介と名前をお願いね。」

「はい」

俺は霧音怜と黒板に漢字で書いて

「霧音怜です。親の転勤で最近こっちに来ました。趣味は漫画とゲームです。」

「じゃあ、席は一番後ろの空いてる席にね。」

「わかりました。」

俺は席に座ると、教科書とノートを出し、教室にいる生徒を観察することにする。他のオリ主がいないとも限らないし、きっちり観察しねぇと後に後悔するからな。流石にシィルのような見た目まんまオリ主みたいなアホはいないか・・・・でも、転生者とかでありがちな神様たちは全員シィルの味方なのに何故、他のオリ主のことを気にするのだろうか？

「では、教科書の２３ページを開いてください。」

先生の声で教科書を開き始める。俺がオリ主だったら、授業で寝る

よな・・・

第九話（後書き）

すずかは怜が真祖の吸血鬼なので本能的に好意を持ちます。
他のオリ主については、数人シィルが倒しています。オリキャラは存在しないことをきちんとアカシックレコードで確認後、転生者のみ排除すればよいのですが、佐久間さん達の全世界の要である神様はシィルに協力的ですが、各世界の神様はバグが発生したり、独自の考えで転生者を発生させる可能性を持っているので、かなりの数がいるわけでもないが、確実に数はいます。
シィルはオリ主の可笑しい能力（ナデポ、ニコポ）や固有結界の発動した瞬間位置情報を確定できる。なので、残っているとしたら比較的まともか頭が良いかだろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8258s/

妹がリリカルで適当に武力介入

2011年12月29日03時50分発行